

○本丸東丸諸門  
寶曆五年幕府國目附尋問の答書に、本丸門五ヶ所、建坪四百坪、右は櫓並に長屋門之建坪。とあり。金城深秘錄に、城中御門・長屋・御櫓名目員數寶曆燒失以前之模様取調書あり。

本丸之部

鐵御門 士番所 足輕番所  
埋御門 御臺所口御門共云 鐵御門續也。

小口御門

桐之木御門 雁木坂 極樂橋から堀之内御門。

新埋御門

柿木御門 但文化五年造營之節挽戸に成。間違歟。

東丸之部

附壇御門 出し一つ 足輕番所

唐御門 士番所 足輕番所

内車橋御門 足輕番所

按ずるに、右門名の内、車橋門は關屋政春古兵談に、寛永八年四月十四日の火災の時、利常卿の使命を蒙り、薪丸よ

り車橋への坂を下るに云々。といふ事を載せたり。此の外の門名も皆古名なるべし。

○極樂橋

本丸と二丸との堺なるから堀に架けたる橋梁なり。此の橋を渡り本丸へ登る段を雁木坂と云ふ。此の橋名は、當城創立以前よりの古名にて、金城深秘錄に、往昔本丸に本源寺ありて、下間法橋寺居住の頃、士民共信仰して、本丸の地を上品上生の臺となし、參詣する道の橋なる故に、極樂橋と名付くるよし。其節の手水鉢の石二つある内、一つは今もあり。一つは薪丸下櫓臺に積込有之。と云へり。三州志來因概覽附錄には、本源寺城中にありし頃、死人の葬棺を此の橋下より送りし故の遺名なりと傳承す。といへり。按ずるに、三壺記に、慶長七年五月金澤城に於て太田但馬守を討伐せしめられ、死骸をば本丸二丸の間なる極樂橋の爪に置き、主君の目をぬく徒者の果を何れ茂見物せよとて出し置かれしゆゑ、往來の者見物す。と見え、又慶長十九年芳春院殿・玉泉院殿金澤へ御戻り、御前様は本丸に居給ひ、城中の賑ひ大方ならず。犀川・淺野川に興行する歌舞伎

共を御城へ召されける故、山里までも聞き傳へ、つゝじつばきは山の端を照らす城の上郎衆は極樂橋を照らすと、唱歌にうたへりとぞ。又元和二年の頃までは宮腰街道犀川

の方にありて、御城より見おろせば九折にて見苦しとて、極樂橋の上より目の下に見ゆるやうに、直道に作らせらる。とあり。今枝直方の悦草に、微妙院殿の御世に、宮腰道を玉泉院殿丸より直に見切り給はんとて、大石を引くに事よせて直ぐに被成しも、奥意ある事成るべし。といへり。三州志頭書に、一舊記に、寛永八年四月十四日金城火に罹る時、微妙公は極樂橋より、世子は鶴丸より出でさせられ、三丸高知番所邊にて出合ひ給ふと云ふ事見ゆ。とあり。

○堀内道

鶴丸より玉泉院丸へ通ふ時は、本丸二丸境ひのから堀通りを通ふ故に、堀内道と呼べり。塹中をば往來する故也。按ずるに、三州志に昔本源寺本丸にありし頃、死人の葬棺を極樂橋の下より送りたる由云ひ傳ふとあれば、本源寺の頃より堀中を往來せしと聞ゆ。又年譜に、寶永二年閏四月蚌蛇二疋城中に顯る。一疋は本丸下御堀上の路邊に顯る。

とあるも、堀内道の上路邊に出でたるもの也。此の地邊は従前より荊棘生ひ茂りける故也。

○二丸

金城隆盛私記に云ふ。一字堂建立此山云々。於是七里三河據今本丸之地。坪坂伯耆・杉浦壹岐・三林善四郎居住於二・三丸。是等之説老人道塗謂焉。とあり。有澤武貞の金澤細見圖譜にも、長享の初め御山を城に取立て、七里三河守を置く。是本城なりと云ふ。坪坂伯耆・三林善四郎等は二・三の丸に居し、本願寺門跡より加州の目代として、一揆の黨を下知する事、其事跡往々有之。然れども其の構へ未だ纒かなる事と見たり。とあり。三州志來因概覽附錄に云ふ。二丸は天正の初め、賊魁坪坂伯耆居す。今猶二丸便殿近く、坪坂の遺墳存す。我が世と成りては、公本丸に居城の處、寛永八年の災後より二丸に居給ふ。といへり。平次按ずるに、三壺記に、文祿元年二月下旬利家卿上洛、世子利長卿へ被仰置、金澤城の石垣築造を命ぜられけり。此の時二・三の丸・西の丸・北の丸まで人持大身衆の居屋敷に渡り、各、美々敷屋形を建て並べけり。と見たり。されば